「愛」　　2015 年 02 月 27 日

コリントの信徒への手紙 一 13 章 4 節～7 節。 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

パウロは「愛」は上記のような内実であると書いている。愛という言葉に触れる時、暖かく、嬉しい思いになる。それは、愛し合う関係を見た時、暖かい気持ちになり、愛された時、嬉しい思いになるからである。ところが、パウロの語る愛には、そのような響きはない。パウロは愛の関係を見るとか、愛されたとかいうのではなく、自分が人を愛する立場に立って愛が何であるかを語っている。人を愛するとは自分が損をすることである。犠牲のない愛はあり得ない。主イエスは十字架にかかり、自分の命を献げて愛を示された。上記の御言葉の「愛」のところを「主イエス」に入れ替えて読むと、すっきり納得して読むことができる。パウロの語る愛は、愛されることではなく、主イエスに倣い、愛する視点から捉えた愛であることを知って、理解しなければならない。

まず「愛は忍耐強い」と言う。後半にも「すべてを忍び」「すべてに耐える」と愛は忍耐し続けることであると語っている。愛は忍耐などと考えたことは少ないだろうが、パウロは、愛は忍耐であると力説している。

続いて、愛は情け深い、妬まない、自慢せず、高ぶらず、礼を失しないと言う。愛は人との関係性の中にある。それは「礼儀」と言ってもいいだろう。礼儀を重んじ、横柄に振る舞わず、相手を寛容に受け入れ、どこまでも尊重する。

そして、愛は自分の利益を求めず、苛立たず、恨みを抱かないと言う。自分の利益を求める時、それが叶えられないと、苛立ちと恨みが生じる。主イエスの愛は自分を与え尽くす自己犠牲の「アガペー」であった。

更に、愛は「不義を喜ばず、真実を喜ぶ」と言う。不義は人を陥れることであり、真実は人を生かし、互いに高め合うことである。愛は常に積極的、肯定的に働く。主イエスの十字架は罪の赦しという人間の生の絶対的肯定の福音である。福音は人間を否定する諸々の力に否を言い、肯定へと向かわせる。愛はマイナスをプラスに変えるように働く。

最後に「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」と言う。この言葉がパウロの愛の核心であろう。私は、信じ、耐え、望み、の順番であると思っている。相手を信じる、そして犠牲を負う忍耐を受容する。そこから将来を望む展望が開かれていく。それが、愛に生きるということである。

「愛は忍耐ではない」という衝撃的な言葉を聞いたことがある。それは、夫からの暴力に晒され、身も心もボロボロになり、死に至ったＤＶのケースを見聞きした人の怒りの言葉であった。結婚式において、「愛は耐える」と教えられ、神の前で夫婦の誓約をした。彼女は誓約を守り抜き、愛を持って忍耐していきたいと願った。けれども、現実には暴力を受け続け、破れて、離婚し、体と心に負った傷は大きく、病死した。忍耐にも限度があろう。「信じ」て「耐え」た先に「望み」が見えない愛は苦しい。聖書の言葉も、立場と見方によって多様に批判、解釈される。パウロの語る愛は感情的ではなく、意志的である。そして、現実をわきまえる理性を伴いつつ受け止めることが必要ではないか。